

## 書家としての呉禱・補遺 2

附：呉禱名一覧

沢本香子

清末民初に翻訳家として活躍した呉禱宣中（丹初）は、天涯芳草館という室名をもつ書家でもあった。それによって次のことが判明する。天涯芳草、天涯芳草館主などと署名をしている小説翻訳作品は、呉禱宣中の筆になるものだった。

これが前稿「書家としての呉禱」（『清末小説』第32号2009.12.1）の主張である。

呉禱が翻訳家、また教育家だったことは知られている。一方で、いかにもありふれていそうな天涯芳草館だ\*1。その室名、署名（天涯芳草、天涯芳草館主人など。別署という）をかかげる小説作品は、少数だが実際に存在する（「附：呉禱名一覧」を参照。以下、一覧と略す）。しかし、翻訳家呉禱と天涯芳草館がつながっているとはわかっていなかった。天涯芳草館は、普通の人名録、筆名録類には収録されていない。

解明の手順を復習しておく。

鍵語は、呉宣中である。この呉宣中を要にして翻訳家呉禱宣中と天涯芳草館が関連づけられる\*2。

当時の新聞に掲載された書画の揮毫料広告がある。潤例、また潤格という。それらのひとつに「天涯芳草館主人呉君宣中」と記述する資料が見つかる。ここから出発した。呉宣中が重要な手がかりだ。すなわち、翻訳家の呉禱宣中が既知だから、それと書家の別署天涯芳草館主人が結びつく。呉禱は、翻訳家であり同時に書家でもあった。いまつけくわえると、2家を兼ねる例はある。李伯元と呉趺人だ\*3。

以上が、現存する資料複数を集め、それらにもとづいて得られた結論である。

ただし、私はつぎのようにも書いている。「天涯芳草館主と呉禱が同時に出現するものはなさそうだ」（110頁）。翻訳家呉禱宣中と天涯芳草館は、関係がある。しかし、それを組み合わせた表記、すなわち「天涯芳草館主呉禱」は、実際には存在

しない。そう記録する文書、印刷物などはない、という意味である。いいなおせば、架空のものだ。現実と架空を区別する必要がある。ここが重要だ。

翻訳家の呉禱宣中を「天涯芳草館主呉禱」と表示する資料がないからこそ、呉禱の経歴について長年の疑問になっていた。

郭長海「天涯处处有芳草 钱塘海陽是両家」(『清末小説』第34号2011.12.1)を検討する。

### 郭長海説

郭長海の主張は、こうだ。天涯芳草館主人を称する呉姓の人物は3人いる。

郭論文の結論を引用して下に示す(説明の都合により記号a b cを沢本がふった)。3者を区別するのは、a 西湖、b 钱塘、c 海陽という原籍(籍貫)である。

- a 西湖 天涯芳草館主人 呉濤
- b 钱塘 天涯芳草館主人 呉禱
- c 海陽 天涯芳草館主人 呉宣中

郭長海によると、呉姓で共通し、同名、さらに天涯芳草館主人という署名までも同じだ。しかし、それらは別人であるという。原籍が異なるからだ。鄭逸梅がいたら注目したかもしれない\*4。

郭論文を読んで気になるちいさな事柄をさきに指摘しておく。

翻訳家呉禱の経歴について「彼は日本に留学した経歴をもつ[他有留学日本的経歴]」と郭長海は書く。呉禱の日本留学を証明する資料があるのか。問うても返答がない。今までの通説を取り入れたと思われる。呉禱宣中は日本語を読むことができた。日本語経由で小説を翻訳している。それからの連想だ。言われているだけ。現在にいたるまで証拠資料を提出した人は、いない。

呉丹初についての言及がない。室名天涯芳草館にはかかわらないと判断したためだろうか。呉禱宣中の経歴をより深く探求する研究方向から離れている。

問題となるのは、郭長海がよってたつ論拠である。上で示したように、彼は、a 西湖、b 钱塘、c 海陽という原籍表示に注目した。同姓同名同室名でありながらまったくの別人が、今になって突然、それも3名も出現した。それは正しいのだろうか。

郭長海論文は成立しない

郭長海は、沢本論文の「結論」に言及している。ただし、表面をながめただけ。日本語論文の漢字をすくい取ったようだ。その結果、彼は a b c と 3 名の天涯芳草館主人を並べることになった。

3 名の別人を目の前にして、私は、どこか違和感をおぼえる。形は整っているように見える。だが、すっきりと納得することができない。なぜか。

前述のとおり私は「天涯芳草館主と呉禱が同時に出現するものはなさそうだと明記した。諸資料を検討した結果だ。ましてや、それが地名の錢塘をともなうことではないと考えている。それとの折り合いが悪いように感じる。

私の前稿「結論」部分を見て確認してほしい。郭長海が掲げる「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」という表記についていえば、もともと書いていないのだ。その表記が実際には存在していないからにほかならない。この重要部分を郭長海は無視している。日本語を理解する人に手助けしてもらおうべきだった。

郭長海は、存在しないと私がわざわざいっているこの組み合わせ表記を、どこから持ち出してきたのか。彼は説明しない。郭にとってはあまりにも当然すぎて、説明の必要がないという判断なのだろうか。原籍 + 別署 + 姓 + 名と記すのが中国の常識だということかもしれない。常識だから説明は必要ではない、ともいうか。そこに落とし穴がある。大きな問題になることを認識していないようだ。

私は、前稿において現存するいくつかの資料を比較参照し仮説を得た。その方法を再度使用して郭説を検証してみよう。

郭説のように原籍を重視するならば、利用できる資料は限定される。天涯芳草館主人につけられた原籍は、「一覽」に示したように 2 種類があるのみ。西湖と海陽だ。

「18海陽天涯芳草館主人呉君宣中」（数字は「一覽」。以下同じ）の「海陽」に注目する。ならば、翻訳家で「錢塘（のちの杭県）」\*5の呉禱宣中は、呉宣中を仲介させようにも「18天涯芳草館主人」とは最初から結びつかない。

原籍を考慮すれば、私の方法では以上のように天涯芳草館主人呉禱を得ることはできない。私を得ることのできない表記を、郭長海は、なにを根拠にして考えだしたのか。奇妙なことだ。

しばらく考えて、郭長海の方法がわかった。

郭長海がいうように、彼は、私の「結論」を出発点にした。

呉禱と天涯芳草館がつながっている（ここまでが沢本説。以下が郭説）ならば、呉禱の原籍である錢塘をともなった「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」がある。

郭長海は「ある」と信じている。疑問に思わないからこそ、説明抜きで「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」を掲げた。しかし、正確に書くならば「あるはずだ」になる。なぜならば、なんどもいうように、そのような表記をもつ文献は現実に存在しないからだ。郭長海は、原籍、別署と姓名に分かれているものを頭の中でこうなるはずだと組み立てたらしい。

「あるはずだ」と「ある」は、違う。その差異をあいまいにすることはできない。ここが区別できないと郭長海と同じになる。

郭長海は、沢本論文の仮説を出発点にしたくらいだから、私の提出した仮説は正しいと考えた。沢本の正しい仮説にもとづき、郭長海は逆の方向に推測を行ない、そして誤った仮説を導き出した。

郭説が巧妙なのは、あるいは何も考えなかったのかもしれないが、「a 西湖 天涯芳草館主人 呉禱」と「c 海陽 天涯芳草館主人 呉宣中」のふたつにならべて、「あるはず」の、実は架空の「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」を挿入したことだ。

実在するものとそうでないものを並置した。その結果、一見してみつつの表記が、ともに実在するかのような誤解をあたえる。それが私のいだいた違和感の原因だった。

a 西湖とc 海陽は、資料として目の前に存在する。しかし、郭のいう「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」は、仮説を重ねた推論だ。彼にとっては常識か。重要なのは、つぎのことだ。すなわち、証拠となる新聞記事などの当時の資料があるのだろうか。もし、それがあれば、郭長海は提出すべきだ。このたび郭が追加した資料（一覧2、4、5）は、いずれもb 錢塘ではない。

重要な箇所だから再びくりかえす（これだけ述べれば理解してもらえらるだろう）。

「b 錢塘 天涯芳草館主人 呉禱」は、郭長海が「あるはずだ」と考えた架空の表記である。それをあたかも事実のように掲げた。郭がおかした大きな誤りだといわなければならない。事実であるa cと架空のbを並列することは間違いである。郭論が成立しない理由だと私はいう。

以上にのべたとおり、郭長海論文は成立しない。問題自体が成立しないのだから、本来ならばそれで終わりだ。

蛇足だとわかってはいるが、ほかの問題点にも触れておく。

郭論文の問題点は、論拠、判断基準である原籍についてのもある。

a b c と並列した郭長海の書き方を見ると、天涯芳草館主人が登場するとき、常に原籍の西湖、銭塘、海陽などがついているかのような印象をあたえる。だが、実際はそれほど単純ではない。

本稿の「一覧」に掲げた28例のうち、西湖は3例、海陽を表示するものは1例にすぎない(ついでに、銭塘または杭県で3例)。

海陽の1例(一覧18)を見てみよう。『笑林報』1910.5.29付「天涯芳草館免資作為江侍卿留紀念」の「海陽天涯芳草館主人呉君宣中…… / 岑春煊、盛宣懷、瑞澂、袁樹勳、徐定遠、沈淳和識」部分に注目する。「呉君宣中」という記述である。

「君」を使っているから他人がそう呼んだとわかる。呉宣中が、自分で海陽を称したわけではなさそうだ。

郭説を実例に適用して、次の問題が解決するだろうか。

一覧4と5の「天涯芳草館主人」は、a 呉濤か c 呉宣中か。郭説によるかぎり答えることはできない。判断する手がかり、すなわち原籍が示されていないのだ。

つぎの例はどうなるか。

「14天涯芳草記」は、『競立社小説月報』第1-2期に掲載された(法)雷科著「(裁判小説)博浪椎」だ。

「15天涯芳草」は、同誌第2期の「(札記小説)開国会」という作品の作者を示している。

つづく「16天涯芳草館主人記」も、(徳)摩哈孫著『虚無党真相』(広智書局)の訳者だ。

「17天涯芳草館主宣中記」は、郭説を適用すれば書家のc 呉宣中である可能性がたかい、となるか。しかし、これが『申報』に発表された(美)濮倫孫記「(冒険短篇小説)二十六点鐘之大飛行」という小説の翻訳者名であるのはなぜなのか。

以上は、銭塘(のちの杭県)と明示していなくても翻訳家の呉構宣中の作品だと考えるのが妥当である。

これらの疑問点に郭長海は答えることができない(郭長海氏へは実際に一覧表を送りa b cの振り分けをお願いした。だが、できない、という回答だった)。

## 結 論

郭長海の誤りは、「b 銭塘 天涯芳草館主人 吳禱」という資料の裏付けがない表記を持ち出したことだ。

私は「なさそうだ」とわざわざ否定している。拙論の結論部分にも存在しない。つまり、郭長海は推測して作り出した。これを取りだしたことによって、彼がおかしたふたつの誤りが明らかとなる。

その1：郭説が根拠とする原籍表示からは、いまある資料を検討しても「b 銭塘 天涯芳草館主人 吳禱」という表記は出てこない。ないものがある、と説明している。その矛盾は、郭説がもともと成立しないことを証明している。

その2：「a 西湖 天涯芳草館主人 吳濤」と「c 海陽 天涯芳草館主人 吳宣中」のふたつが新聞記事に見えるのは本当の事だ。それら実在するもののなかに、架空の「b 銭塘 天涯芳草館主人 吳禱」をすべりこませた。郭長海は、現実とそうでないものの区別がつかないらしい。

私が郭長海に望むことを要約すれば、次のようになる。

「銭塘 天涯芳草館主人 吳禱」と明記した現存する翻訳小説作品を指摘してほしい。その際、銭塘が抜けていないか、くれぐれもご注意いただきたい。 ☐

附：吳禱名一覧（翻訳作品を網羅しているわけではない。西湖、海陽を表示するものに下線をほどこす）

- |                  |                       |  |
|------------------|-----------------------|--|
| 1 /1900.3.23     | 天涯芳草館主吳禱              | 『中外日報』「天涯芳草館主贈字」『潤例』76頁 吳禱             |
| 2 /1900.4.16     | <u>西湖天涯芳草館主人</u>      | 『遊戯報』茂苑惜秋生と / 郭長海論文                    |
| 3 /1900.5.7      | 總經理 <u>西湖天涯芳草館主吳禱</u> | 『同文滬報』「創設書画公会報啓」                       |
| 4 /1900.8.31     | 贈別天涯芳草館主人             | 『遊戯報』 / 郭長海論文 / 筆者の當湖惜霜は、書画公会副総理李成蹊である |
| 5 /1901.11.27-29 | 天涯芳草館主人               | 『遊戯報』「花花世界 道情」 / 郭長海論文                 |
| 6 /1902          | 吳丹初                   | 愛国学社 歴史、地理教科書 蔣維喬「編輯小学教科書之回憶」          |
| 7 /1902          | 吳丹初                   | 愛国学社 伝統音楽 俞子夷「回憶蔡元培先生和草創時的光復会」         |

- 8 /1902-05 吳丹初 愛国学社、中国教育会 高平叔『蔡元培年譜長編』
- 9 /1903 吳禱訖 『支那帝国主人第一人成吉思汗少年史』（日）坂口瑛次郎撰
- 10/1903? 吳禱訖 『社会改良家列伝』（日）松村介石著
- 11/1906.2.13 西湖天涯芳草館主人 『音楽小雑誌』第1期 「天涯曲 題天涯萍梗図」
- 12/1906? 中国錢塘吳禱重演 『繡像小説』第72期 「（軍事小説）斥候美談」
- 13/1907.8.24 由錢塘吳丹初訖 『同文滬報』廣告「新刊小説」
- 14/1907.11.3-11.29 天涯芳草訖 『競立社小説月報』第1-2期 「（裁判小説）博浪椎」（法）雷科著
- 15/1907.11.29 天涯芳草 『競立社小説月報』第2期 「（札記小説）開国会」
- 16/1907.十一 天涯芳草館主人訖 『虚無党真相』2冊 （德）摩哈孫著 広智書局
- 17/1910.1.27-29 天涯芳草館主宣中訖 『申報』 「（冒險短篇小説）二十六点鐘之大飛行」（美）濮倫孫記
- 18/1910.5.29 館主吳宣中謹啓 / 海陽天涯芳草館主人吳君宣中 『笑林報』 「天涯芳草館免資作為江侍卿留紀念」 『潤例』88頁
- 19/1912.9.9 吳丹初 『張元濟日記』
- 20/1913.1.30 収吳丹初訖稿俠女郎 『張元濟日記』 『張元濟年譜』
- 21/1913.1-2.25 中華吳禱宣中訖 『小説月報』3卷10-11号 「（冒險小説）俠女郎」（日）押川春浪
- 22/1914.4再版 杭吳禱重訖 『賣国奴』上海商務印書館 說部叢書1=16
- 23/1915.12.2 天涯芳草館主吳君宣中 『申報』 「中国紅十字会佈告吳宣中君鬻字助賑」
- 24/1920 吳宣中 書画家寓址（上海商業名録） 『潤例』390頁
- 25/1921.10.19 吳宣中 『申報』 「海内書家吳宣中篆隸真草潤例」 『潤例』103頁李經羲
- 26/1925.5.2 吳宣中 『申報』 「書法名家吳宣中先生篆隸真草書例」 『潤例』165頁李經羲
- 27/1926 吳宣中 書画家寓址（上海快覽）書家 『潤例』390頁
- 28/不明 宣中吳禱 扇片 于建華 『名家扇書扇画漫説』2008.1

連絡先が同じ 華安合群保寿公司

【注】

1) 天涯芳草館を使う例として次がある。張乙廬「天涯芳草館筆記」だ。李伯元逸

事を記録したもの。『小説日報』1923.1.26初出未見／魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12。15頁／朱一玄編『明清小説資料選編』下 天津・南開大学出版社2006.9。823頁

- 2) 王中秀、茅子良、陳輝編著『近現代金石書画家潤例』（上海画報出版社2004.7 / 2005.9第2次印刷。以下『潤例』）がある。新聞に掲載された書画家の揮毫料広告をたんねんに収録した貴重な資料集だ。

該書423頁に、吳禱壺中の略歴が掲げてある。書家として著名、しかも清末にロシアの名著を紹介した著者である、と説明する。その彼が室名天涯芳草館を使用していた、と指摘するのが新しい。王中秀らは、潤例を集めてそういう結論に到達したようだ。

該書に収録された新聞広告について、マイクロフィルムなどを見て自分でも確かめた。数は少ないが新資料の発掘を行なうことができた。たとえば、王中秀らの示す資料が、人名の部分で1ヵ所が間違っていることに気がつく。吳禱とされているが、実際には吳濤であった。吳濤は、吳禱と通音する。

- 3) 小説家兼書家の例を次に示す。小説家と書家が厳密に分離していたわけではない。小説界と書画界は重複する部分がある。注2に示した『潤例』から頁数を示す。

李伯元 71、78、79

遊戯主人 遊戯報1899.1.2 『潤例』70頁 454頁は別人あつかい

南亭亭長 遊戯報1899.3.27 『潤例』71頁

南亭 世界繁華報1901.8.1 『潤例』78頁

南亭 遊戯報1902.6.3 『潤例』79頁

吳趸人 70

采風主人 采風報1899.2.15 『潤例』70頁

- 4) 同じ署名をするふたりの人物を記している。鄭逸梅『藝林散葉』北京・中華書局1982.12「3181 蔣竹莊同時有兩人，一常州人，名維喬，以學術有聲於時。一梁溪人，名旭丹，工書善畫，皆以竹莊為署」234頁

- 5) 吳禱の原籍表示は以下のとおり。原籍だから中国、中華を含めるのは不適當だというご意見もあるだろう。そうであるなら、錢塘と杭県のふたつがある。また、中国、中華は吳禱自身が名のつたものか、商務印書館が使用したのかは不明。

中国銭塘 吳禱

銭塘 吳禱、吳丹初

中華 吳禱宣中

杭県 吳禱

銭塘と杭県が同じだという証拠のひとつは、次の作品の訳者表示だ。

銭塘吳禱訳述『寒桃記』上海中国商務印書館 光緒三十二年二月(1906)首版

説部叢書第四集第1編

杭県吳禱訳 同上 上海商務印書館 丙午年二月(1906) / 1913.12四版

説部叢書初集第31編

(さわもと きょうこ)

---

第100号 2011.1.1

小説目録はたのしい ..... 樽本照雄  
《游艇伏尸録》の原作 ..... 渡辺浩司  
Robinson Crusoe 粵語譯本《辜蘇歷  
程》考略 ..... 姚 達兌  
“儒林医隠”非陸士諤考 ..... 謝 仁敏  
晚清小説作者掃描(25) ..... 武 禔  
書家としての吳禱・補遺 ..... 沢本香子

---

第101号 2011.4.1

吳禱の漢訳ゴーリキー(上) ..... 樽本照雄  
《沙場歸夢》の原作 ..... 渡辺浩司  
从“文界上乘”人物“王晋庵”説起  
..... 劉 德隆  
晚清小説作者掃描(26) ..... 武 禔  
夏瑞芳暗殺事件の犯人 ..... 樽本照雄

---

第102号 2011.7.1

吳禱の漢訳ゴーリキー(下) ..... 樽本照雄  
《虎口餘生》の原作 ..... 渡辺浩司  
晚清小説作者掃描(27) ..... 武 禔  
『清末民初小説目録』第4版問答(上)  
..... 樽本照雄

---

第103号 2011.10.1

商務版「説部叢書」研究の昔と今 1  
..... 樽本照雄  
《醫學小説 鑽崇》の原作 ..... 渡辺浩司  
『清末民初小説目録』第4版問答(下)  
..... 樽本照雄  
傅蘭雅“時新小説”徵文獲獎作品序文鈔  
(上) ..... 劉 德隆  
2010年世界林紵文化研究文献目録  
..... 蘇 建新